

## 高校生の学力意識に関する研究

### — 生徒全体の傾向と男女の差について —

High school students' consciousness of their own English abilities

- The general tendency and the gender difference -

キーワード：過大評価、過小評価、男女差

Key words : overestimation, underestimation, gender difference

内藤 徹  
NAITO, Toru

#### 1. はじめに

形式的評価の重要性が強調されているが、その中で自己評価も大切な評価の一つである。しかし、学習者の過大評価や過小評価など問題点もある。そのような中において、学習者の自己評価についての意識の傾向を知ることは、教授者にとって必要なことであると思われる。そして、この意識は、個人によって異なるが、男女間にも差があるだろうと推測できる。例えば、自己評価をさせた場合、女子の方が一般的に自分の学力を低く見ているのではないかと思えることがある。また、高校生の受験期において、センター試験の結果、弱音をはいて二次受験校のランクを下げるのも、女子に多いように思える。

今回、普通科高校の生徒を対象に、どのような場合に自分の学力を過大評価したり過小評価したりするのかを調べた。教授者の指導や評価の一助にすることができれば幸いである。

#### 2. 実験研究

##### 2. 1 目的および文献

学習者に「クラスの中で、自分の英語の学力は、5段階のどこに位置すると思うか」というアンケート形式の調査をすることにより、実際の学力(学習成績)の段階とアンケートの段階とを比較する。すなわち、自分の学力を過大評価しているか、過小評価しているか、または、適切に評価しているかについて明らかにしたい。また、男女間にその意識の差があるのかどうかについても調べたい。

これらのことについて、Underhill(1989)は次のように述べている。

A history of unspectacular and unenjoyable academic achievement will probably lead the learner to underestimate his abilities. Women in general will often rate themselves lower than men when they are, in fact, at least as good; similarly, older learners will often rate themselves lower than younger learners.

##### 2. 2 仮説

普通科の高校生は

1) 受験という特殊な環境に置かれるため、劣等感を持つ場合が多く、自分の学力を過小評価する傾向がある。

2) 女子は男子と比べて、自分の学力を過小評価する傾向がある。

##### 2. 3 実施時期と被験者： 平成 9年10月実施、被験者数 159名

被験者内訳： 鯖江高等学校 1年生1組(特別進学コース)40名、3組(普通コース)40名  
3年生2組(特別進学コース)40名、6組(普通コース)39名

##### 2. 4 分析方法

偏差値 (DEVIATION VALUE) [級内での相対的位置を調べ、5段階に分ける]、

平均 (MEAN)、標準偏差 (STANDARD DEVIATION=SD) [分布]、

K-R 21 (KUDER-RICHARDSON 21 FORMULA) [RT=信頼度]、

相関係数 (PEARSON PRODUCT MOMENT COEFFICIENT) [英語2科目間の相関]

t-TEST [平均の有意差検定]、 $\chi^2$ -TEST [アンケートの有意差検定] など

##### 2. 5 結果および分析

段階と偏差値

TABLE 1	段階	偏差値
	1	- 39.3
	2	39.4 - 46.3
	3	46.4 - 53.2

4 53.3 - 60.1

5 60.2 -

## 1年1組

		英語の 成績	実際の 段階	アンケートの 段階	差	TABLE 3 t-TEST
クラス	NUMBER	40	40	40		
	TOTAL	2775	122	93		t=2.782, df=71
	MEAN	69.38	3.05	2.33	0.73	** p<0.008
	SD	10.46	1.30	0.96		
	RT	0.81				
男子	NUMBER	20	20	20		
	TOTAL	1314	52	48		t=0.531, df=33
	MEAN	65.70	2.60	2.40	0.20	p<0.6
	SD	11.54	1.36	0.92		
女子	NUMBER	20	20	20		
	TOTAL	1461	70	45		t=3.738, df=38
	MEAN	73.05	3.50	2.25	1.25	***p<0.001
	SD	7.65	1.07	0.99		

TABLE 4

## アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	4(10%)	6(15%)	10(25%)
女子	0(0%)	16(40%)	4(10%)
合計	4(10%)	22(55%)	14(35%)

TABLE 5

## 段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語 I と英語 0C の相関	= 0.85***	p<0.001
1	7	11			
2	6	8			
3	11	18			
4	10	3			
5	6	0			

## 1年3組

		英語の 成績	実際の 段階	アンケートの 段階	差	TABLE 7 t-TEST
クラス	NUMBER	40	40	40		
	TOTAL	2352	129	95		t=3.458, df=78
	MEAN	56.70	3.23	2.38	0.85	***p<0.001
	SD	15.70	1.19	0.97		
	RT	0.91				
男子	NUMBER	19	19	19		
	TOTAL	1059	56	45		t=1.757, df=36
	MEAN	55.74	2.95	2.37	0.58	p<0.1
	SD	9.98	1.00	0.98		
女子	NUMBER	21	21	21		
	TOTAL	1293	27	45		t=3.244, df=40
	MEAN	61.57	3.48	2.38	1.10	** p<0.003
	SD	14.50	1.19	0.94		

TABLE 8

## アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	6(15%)	8(20%)	5(13%)
女子	1(2%)	15(37%)	5(13%)
合計	7(17%)	23(57%)	10(26%)

TABLE 9

## 段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語 I と英語 OC の相関	= 0.81***	p<0.001
1	6	9			
2	9	11			
3	10	16			
4	8	4			
5	7	0			

## 3年2組

TABLE 10

クラス	英語の成績	実際の段階	アンケートの段階	差
	NUMBER 40	40	40	
	TOTAL 2811	126	95	
	MEAN 70.28	3.15	2.38	0.77
	SD 12.67	1.22	0.91	
	RT 0.88			
男子	NUMBER 24	24	24	
	TOTAL 1768	82	62	
	MEAN 73.67	3.42	2.58	0.84
	SD 12.77	1.22	1.00	
女子	NUMBER 16	16	16	
	TOTAL 1043	44	33	
	MEAN 65.19	2.75	2.06	0.69
	SD 10.67	1.09	0.66	

TABLE 11 t-TEST

t=3.061, df=71  
\*\* p<0.002

t=3.321, df=46  
\* p<0.02

t=2.394, df=30  
\* p<0.03

TABLE 12

## アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	2(5%)	19(48%)	3(7%)
女子	0(0%)	10(25%)	6(15%)
合計	2(5%)	29(73%)	9(22%)

TABLE 13

## 段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語 R と英語 W の相関	= 0.84***	p<0.001
1	2	6			
2	8	18			
3	12	12			
4	15	3			
5	3	1			

TABLE 14

	英語の 成績	実際の 段階	アンケートの 段階	差
クラス	NUMBER 39	39	39	
	TOTAL 2536	116	93	
	MEAN 65.03	2.97	2.38	0.59
	SD 16.02	1.27	1.15	
	RT 0.92			
男子	NUMBER 14	14	14	
	TOTAL 778	32	28	
	MEAN 55.57	2.29	2.00	0.29
	SD 13.77	1.16	1.07	
女子	NUMBER 25	25	25	
	TOTAL 1758	84	65	
	MEAN 70.32	3.36	2.60	0.76
	SD 14.70	1.16	1.13	

TABLE 15 t-TEST

t=2.123, df=76
* p<0.04
t=0.663, df=26
p<0.6
t=2.299, df=48
* p<0.03

TABLE 16

アンケート分析の人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	2(5%)	7(18%)	5(13%)
女子	2(5%)	15(38%)	8(21%)
合計	4(10%)	22(56%)	13(34%)

TABLE 17

段階の人数分布

段階	実際	アンケート	英語Rと英語Wの相関	= 0.85***	p<0.001
1	5	11			
2	10	10			
3	12	12			
4	5	4			
5	7	2			

TABLE 18

アンケート全クラスの分析／人数と百分率

	過大評価	過小評価	適切な評価
男子	14(9%)	40(25%)	23(14.5%)
女子	3(2%)	56(35%)	23(14.5%)
合計	17(11%)	96(60%)	46(29%)

合計の3項目間のカイ自乗検定

$$\chi^2 = 37.858, \quad df = 2$$

\*\*\*p&lt;0.001

## 2. 6 考察

偏差値の段階は、仮に得点を1から100まで並べ、それを5等分したものである[TABLE 1]。すなわち、1段階は39.3以下、2段階は39.4から46.3、3段階は46.4から53.2、4段階は53.3から60.1、5段階は60.2以上である。

それでは、実際の英語の学力の段階とアンケートの段階に、どのような差があるのかを見ていこう。1年1組[TABLE 2]。クラスの英語の平均は69.38、標準偏差は10.46、信頼度は0.81である。テ

ストとしては、信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.05、標準偏差は 1.30、アンケートの段階の平均は 2.33、標準偏差は 0.96 である。t 検定 [TABLE 3] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.8% 水準で有意差がある。男子は、平均が 65.70、標準偏差は 11.54 である。実際の学力の段階の平均は 2.60、標準偏差は 1.36、アンケートの段階の平均は 2.40、標準偏差は 0.92 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には有意差は見られない。女子は、平均が 73.05、標準偏差は 7.65 である。実際の学力の段階の平均は 3.50、標準偏差は 1.07、アンケートの段階の平均は 2.25、標準偏差は 0.99 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.1% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言える。男子と女子に分けると、女子は自分の学力を明らかに過小評価していると言える。しかし、男子はそうとは言えない。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 4] からとも言える。これによると、男子では過大評価しているものが 10% いるが、女子は 0% である。これに対し、過小評価しているものは、男子では 15% であるが、女子では 40% も見られる。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多く比較的ノーマルな形である [TABLE 5]。また、英語の学力点は、英語 I (R) と英語 O C (含 GRAMMAR) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.85\*\*\* で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、学力点が安定し、信頼性が高いと言える。

1 年 3 組 [TABLE 6]。クラスの英語の平均は 56.70、標準偏差は 15.70、信頼度は 0.91 である。テストとしては、これも信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.23、標準偏差は 1.19、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 0.97 である。t 検定 [TABLE 7] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.1% 水準で有意差がある。男子は、平均が 55.74、標準偏差は 9.98 である。実際の学力の段階の平均は 2.95、標準偏差は 1.00、アンケートの段階の平均は 2.37、標準偏差は 0.98 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には有意差は見られない。女子は、平均が 61.57、標準偏差は 14.50 である。実際の学力の段階の平均は 3.48、標準偏差は 1.19、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 0.94 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.3% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言える。男子と女子に分けると、女子は自分の学力をかなり過小評価していると言える。しかし、男子はそうとは言えない。これは、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 8] からとも言える。これによると、男子では過大評価しているものが 15% いるが、女子は 1% である。これに対し、過小評価しているものは、男子では 20% であるが、女子では 37% も見られる。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多くかなりノーマルな形である [TABLE 9]。また、英語の学力点は、英語 I (R) と英語 O C (含 GRAMMAR) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.81\*\*\* で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、このクラスでも学力点が安定し、信頼性が高いと言える。

3 年 2 組 [TABLE 10]。クラスの英語の平均は 70.28、標準偏差は 12.67、信頼度は 0.88 である。テストとしては、これも信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 3.15、標準偏差は 1.22、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 0.91 である。t 検定 [TABLE 11] により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 0.2% 水準で有意差がある。男子は、平均が 73.67、標準偏差は 12.77 である。実際の学力の段階の平均は 3.42、標準偏差は 1.22、アンケートの段階の平均は 2.58、標準偏差は 1.00 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 2% 水準で有意差がある。女子は、平均が 65.19、標準偏差は 10.67 である。実際の学力の段階の平均は 2.75、標準偏差は 1.09、アンケートの段階の平均は 2.06、標準偏差は 0.66 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 3% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言える。男子と女子に分けても、両方とも自分の学力を過小評価していると言える。比較的難易度の高い大学の受験を間近に控えた生徒達はこのような傾向を示すのかも知れない。しかし、アンケート分析の人数と百分率 [TABLE 12] によれば、男子には過大評価しているものが 5% いるが、女子は 0% である。そして、過小評価しているものは、男子では 48% であるが、女子では 25% と 1 年生とは少し異なった傾向を示している。さて、実際の段階の人数分布であるが、良くできるクラスということもあり、4 段階が最も多く次に 3 段階という形である。 [TABLE 13]。また、英語の学力点は、英語 R (READING) と英語 W (WRITING) の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.84\*\*\* で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、このクラスでも学力点が安定し、信頼性が高いと言える。

3年6組[TABLE 14]。クラスの英語の平均は 65.03、標準偏差は 16.02、信頼度は 0.92 である。テストとしては、これも信頼性があると言える。実際の学力の段階の平均は 2.97、標準偏差は 1.27、アンケートの段階の平均は 2.38、標準偏差は 1.15 である。t 検定[TABLE 15]により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 4% 水準で有意差がある。男子は、平均が 55.57、標準偏差は 13.77 である。実際の学力の段階の平均は 2.29、標準偏差は 1.16、アンケートの段階の平均は 2.00、標準偏差は 1.07 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には有意差は見られない。女子は、平均が 70.32、標準偏差は 14.70 である。実際の学力の段階の平均は 3.36、標準偏差は 1.16、アンケートの段階の平均は 2.60、標準偏差は 1.13 である。t 検定により、実際の段階とアンケートの段階の平均の間には 3% 水準で有意差がある。従って、クラス全体が、自分の学力を過小評価していると言えるが、男子と女子に分けると、女子は自分の学力を過小評価していると言える。しかし、男子はそうとは言えない。これは、アンケート分析の人数と百分率[TABLE 16]からも言える。これによると、男子では過大評価しているものが 5%、女子でも 5% である。これに対し、過小評価しているものは、男子では 18% であるが、女子では 38% も見られる。さて、実際の段階の人数分布であるが、3 段階が最も多く比較的ノーマルな形である[TABLE 17]、また、英語の学力点は、英語 R (READING)と英語 W (WRITING)の合計の平均を用いているが、それら 2 科目の相関係数は 0.85\*\*\*で 0.1% 水準で有意な強い相関があり、このクラスでも学力点が安定し、信頼性が高いと言える。

最後に、アンケート全クラスの分析/人数と百分率[TABLE 18]を見ると、男女の合計では 11% が過大評価しているが、大多数の 60% が過小評価している。適切な評価をしているのは 29% である。そして、 $\chi^2$ 検定でも、これら 3 つの項目間には 0.1% 水準で有意差がある。男女別では、過小評価をしているのが、男子では 25%、女子では 35% で、女子の方が過小評価している傾向が強い。

結論として、t 検定などで分析してきたように、全クラスにおいて、仮説 1) は支持された。仮説 2) は、4 クラスの内 3 クラスでは支持されたが、大学受験、特に難易度の高い大学を目指す生徒達(ここでは 3 年 2 組)においては、男子も女子も共に自分の学力を過小評価する傾向が見られ、男女間にその差がないということで、全クラスにおいて支持されたわけではない。

### 3. おわりに

これまで見てきたように、普通科高校の生徒達は、全体的に自分の学力を過小評価する傾向が強い。これは、受験という非常に熾烈な競争を余儀なくされ、自信を失っていることが大きな要因と考えられる。我々教師は、生徒達に自信をもたせ、萎縮させないように気をつけなければならないといえよう。さらに、多くのクラスで、女子にこの傾向が強く見られる。この結果を今後の指導や評価にも生かし、一助としたいと考えている。

(福井県立 鯖江高等学校)

### 参考文献:

- Brown, H. Douglas 1980. *Principles of Language Learning and Teaching*, Prentice-Hall, Inc.  
Hatch, Evelyn & Farhady, Hossein 1982. *Research Design and Statistics for Applied Linguistics* Newbury House Publishers Inc. pp.80-94. pp.108-121, pp.165-171, pp.192-211, pp.247-249
- Larsen-Freeman, Diane & Long, Michael H. 1992. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, Longman Group Limited
- 内藤 徹 1997. 『新しい 英語教育ハンドブック』 リーベル出版 pp.17-27, pp.30-34
- Richards, Jack et al. 1985. *Longman Dictionary of Applied Linguistics*, Longman Group Limited
- Underhill, Nic 1989. *Testing Spoken Language: A handbook of oral testing techniques* Cambridge University Press p.23